

マイケル・ブラウォイの労働過程論の再検討

——エスノメソドロジ－的視点の有効性——

一橋大学大学院 松永伸太郎

1 目的

この報告の目的は、マイケル・ブラウォイが工場における参与観察研究を通して展開した労働過程に関する議論について、理論的検討を行い、今後の方向性を示すことである。ブラウォイは今日ではパブリック・ソシオロジーを提唱した論者として広く知られているが、研究者としてのキャリアは労働社会学的な研究から開始されている。本報告ではブラウォイの労働過程論における理論的な側面に着目し、その意義と限界を確認し、その限界を乗り越えるための方法論的な展開の方向性を示したい。

2 方法

ブラウォイの研究展開を概括的におさえたうえで、初期の重要な参与観察研究である『同意を生産する』(Burawoy 1979)と、労働過程に関する理論的な考察がまとめられた『生産の政治』(Burawoy 1985)を主な対象とし、その理論と分析の手続きを検討する。

3 結果

ブラウォイの労働過程論は、労働者が労働現場の規則を利用してメイクアウト(うまくやる)することが剰余価値の生産への「同意」の機能を有すること、そして労働過程の経済的次元だけではなく、政治的次元、イデオロギー的次元をとらえようとすることに特徴がある。これらの視座は総じて、①対象となる職場にはいかなる(しばしば明示されていない)規範があるのか、そして②労働者がそうした規範を用いていかなる実践を行っているのかという問いに目を向ける必要があることを示唆している。こうした問いは労働者の視点から過重労働の問題を明らかにすることにつながるものであり、労働社会学において重要な問いとなりうるものである。しかしこれら①②の問いに取り組むための方法論的な議論が、これまでの労働研究ではなされてこなかった。

4 結論

上記の問いに取り組むうえで一つ有効な視角となるのが、エスノメソドロジ－(EM)の視点である。EMは、規範があるとはどういうことかという問題に対して、概念同士の結びつきを記述していくことで解決を与えることができることを明らかにしている。そしてこうした概念の結びつきを用いて人々がいかなる実践を行っているのかに関しても、EMによって議論が積み重ねられてきている。こうした点でEMを労働研究に応用することは、労働過程論が解消できなかった①②の問いに解決を与え、ブラウォイが取り組んだ「同意」への問いの重要性を引き受けながら、過重労働などの労働問題に関するさらなる経験的研究の射程を広げることを可能にする。

文献

- Burawoy, M., 1979, *Manufacturing Consent: Changes in the Labor Process under Monopoly Capitalism*, London: The University of Chicago Press.
- , 1985, *The Politics of Production*. London: Verso.
- Sacks, H., 1972, "On the Analyzability of Stories by Children," in Gumperz, J. and D. Hymes (eds.) *Direction in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, Holt, Rinehart&Winston: 329-345.